



第28号
平成30年10月20日
発行
熊本市北區高平
2-20-35
曹洞宗 浄国寺
編集者
中山 義昭

浄国寺企画 いま、心にZEN 開催案内

浄国寺恒例企画 いま、心にZEN

平成三十年十一月十日(土)

午後五時 禅僧鼎談

テーマ 「今、何故坐禅？」

午後七時 「お寺でジャズ」

ジャズ 鈴木 良雄&Bass Talk

今年もやります

やっと定着してきました。いま、心にZEN。葬送儀礼ではなく、生き続けている人に仏教の教えを届けたいという高校生の頃からの思いを実行し始めて、早十年が過ぎました。どこまで、届いてい

るかとは分かりません。しかし、いつの間にか日本人のバックボーンにあつた筈の畏敬の心が薄まり始め、物質的な欲求と等価交換の概念が大きなウエイトを占めるようになってきました。「何か違うぞ?」「何かおかしい」「そんな思いが人々の心に

違を大きな問題として捉える事は控えるように思っています。決して受け入れられないな



生まれ始めたのが格差社会の伸長と比例するのには皮肉な現象です。しかし、閉塞感を伴った現代社会の中で、心ある人は新たな価値観を模索し始めています。一僧侶として感じています。嬉しい事に、曹洞宗寺院の中で一般に開放した坐禅会を主催するお寺が増えてきました。宗務庁の基本的な布教方針の中にも、やつと坐禅を取り上げられ始めました(ちよつと遅い気はしますが)。グーグルやヤフーでマインドフルネス運動を取り入れられたのも一つの要因かも知れません。私は「禅」とマインドフルネスとの違いや瞑想(内観法)との差

禅僧鼎談

ら何でも良いと思ってい(る訳ではありませんが)大事なのは、今自分が生きている事、呼吸している事、肌に空気を感じている事を改めて認識でき、そして人生は苦であつても人が生きているのは(喜びであると思える事ではないかと考えます。

浄国寺坐禅会も毎回、初めてだけど坐つてみると来られる方が増えてきました。多分、他のお寺でもそうではないかと思ひ、声をかけたところ状況はそれぞれに違うようです。しかし、一般社会の中で、坐禅や瞑想、宗教、スピリチュアルな物に対しての興味が増えているのは共通して感じているようです。それじや、日頃の世間話の中ではないかな話せない事を改めて語る事で何かが見えてくるのではないかと思ひ、熊本市の国分寺、菊池市の玉祥寺の方丈様(曹洞宗では住職の事を方丈様と呼びます)をお呼びして私と三人で座談会をしてはどうかと考えて企画

しました。この三人には、ある共通点があります。それは寺を継いだと言う認識が希薄な事です。玉祥寺様と私は寺の息子ですが、師匠である父親は寺の子ではなく、自分の意志で出家しています。国分寺様は自ら出家されています。出家前は、世界各地を放浪の旅に出た経験もあるそうです。玉祥寺様は、一般サラリーマンとして大手ゼネコンで長い勤務されてきました。私は、企業勤めの経験はありませんが、今も時間の大半は幼稚園長として、学校運営に携わっています。業界内では、少し毛色が違った三人ですが、逆に言えば世間から見た僧侶の姿に気づく事ができる部分もあるのではないかと思います。現在、マインドフルネスという言い方で、坐禅や瞑想に人々の関心が向いているようです。大学の心療内科ではマインドフルネスを一つの治療法として導入していますし、ヤフーやグーグルと言つたネット業界の大手では社内研修にマインドフル

ネスを用いています。いずれにせよ、世間一般の関心が坐禅に向いてくることは良い事だと思います(社会全体の閉塞感が人々を押しつぶし、その結果、坐禅に向いているとしたら、それは問題ですが)。

堅苦しい事は、さておき禅寺の坊さんの雑談や放談を聞く機会もないだろうという所で、気軽に聞いて頂ければと言う厚かましい気持ちで企画しました。この部分は入場無料ですので、時間があれば、足をお運び下さい。

お寺でジャズ

少し前から、少しおしゃれな居酒屋さんで、ジャズがよく流されていました。それが、近頃では、ラーメン屋さんでもBGMにジャズが流されるようになりました。先日某大手チェーン店のちゃんぽん屋さんでマイルス・デイビスが流れた時はびっくりしました。ジャズが難解な音楽と思われていた時代もありましたが、本来は芸術ではなく皆が楽しめるものである事が浸透し



たようです。

お寺は、所謂「慶」の場所であると思われがちです。それも、お寺の役割の一つですが、生きている人に生き方を説く場所であると言う事が、本来の果たすべき役割だと思つていきます。その為には、「お寺は楽しいところだ」「お寺の敷居を少しでも低くしたい」そう思つて始めた企画「お寺でジャズ」も、もう8年続いています。毎年、演奏してくれている鈴木良雄氏(b担当)は、世界のナベサダこと渡辺貞夫のグループでデビュー、本場アメリカで著名プレイヤーとの活動を経て、帰国。彼の音楽は、日本人の琴線に触れる暖かい優しい演奏です。私が大学のジャズ研でベースを弾くようになってからも鈴木氏のアルバムがきっかけでした。その人の演奏を自分も有難い事だと思つて聴けるのも有難い事です。今回のメンバーも日本の有数の演奏家ばかり。技術はものすごいのに、決して押しつけがましくなく、ベテランの味で、演奏してく



れます。ジャズにアレルギがある人もいるかも知れませんが、是非、騙されたと思つて聴きにきて下さい。素敵な一時になるはずですが、今回のグループ「ベース・トック」は3年連続来て頂いています。一昨年は、地震復興工事で壁中ブルーシートが貼つてある中での演奏でした。どういう状態だろうが動じる事なく素晴らし演奏でした。ベテランらしい落ち着いた演奏を毎年奏でてくれます(リーダーが古希、ピアノ、フルートも還暦過ぎていますから)。今年から、新譜の録音に入るそうで、皆さん、いよいよ気合いが入っています。私も楽しみにしています。プロの演奏ですから、一人三千円の協力をお願いします。しかし、このメンバーの演奏を、この値段で聴けるのは、かなりお得だと思います。宜しければ、お出で下さい。席亭特権で、毎年私も、最後の一曲だけベースで参加させて頂いています。



日本カトリック司教協議会の中に諸宗教対話部門というセクションがあります。熊本県の和水町に真命山という教会があり、そこで活躍されているイタリア人のフランコ・ソットコルノラと言う神父様がいらつしやいます。御縁を得て、その神父様と十年以上のお付き合いをしており、時々、諸宗教対話のシンポジウムにパネリストとして参加しています。私は大した事は話せませんが、いつも色々な考え方について学ばせて貰っています。そこで大切なのは、色々な考え方の存在に対する「敬意」だろうと思います。

諸宗教対話

宗教同士だけではなく、人との対話も同様です。しかし、対話が議論になり、論争になる時、我々は相手を黒く塗る事で、自分の白さを確認する作業を行う時があります。これは、大変危険な事だと思えます。人を黒く塗つても、自分が白くなる事はないと言う点を忘

れないようにしないと誤つた方向に走ると思っています。

娑婆は娑婆

「教育」と「福祉」。いずれも公益性という視点では共通である。しかし、それぞれが別の特性を持つている。「教育」は対価計算が成立しない分野の筈だ。お金と時間をかけたから、それに見合う結果が出るとは限らない。これに対して「福祉」は、対価計算から考えると不平等な部分に、社会的弱者の保護という目的で正当性を与えるものである。例えば教育の補助は、教育の公益性と有用性に対しての経済的援助である。福祉の補助は、弱者保護の理由であるから、そこに個別の正当性と妥当性が必要になる。それがなければ単なる不平等の補助になる。うちの幼稚園が文科省管轄の教育機関である「幼稚園」から「認定こども園」になり福祉機能が付加された。福祉は受益者が見える。その分、不平等への審査は厳しくなるのは当然だ。計測不能な結果への補助に慣れた教育機関からすると、受益への審査が「ネコババ」= 不当受得の疑いを受けているような気分になることがある、まだ慣れない。こども園の受益者は施設と保護者だ。時々思う。福祉の受益は絶対的な権利か？

定例木曜坐禅会

毎週木曜日 午後八時より 当山本堂にて
一炷(約四十分) 坐禅をして、坐禅に関する著述の解説(約二十分) 会費・会則一切なし、初めてのの方はご連絡下さい